

カルヴァンの教育思想の特色

吉岡 良昌

はじめに

カルヴァンは、ルター、ツウイングリ、メランヒトン、エラスムスらと比較して、全く学校や教育に関する書物を著わしていない。従って、カルヴァン研究の中でも、教育についての研究業績は少ない。これは一体、何を意味しているのであろうか。カルヴァンには教育思想を特に取り出して論じる価値が備わっていないのであろうか。否、むしろ、カルヴァンは教育学を徹底して神学のわくの中に配置したために、外側からは見つけにくいだけである。カルヴァンは、神学における教育的効用について深い洞察を示しており、教育学を神学のわくの中にはめ込みつつ、その教育的価値をはっきりと認めていた教育思想家でもあったといえる。

一般に、宗教改革が教育改革という側面をもつとするならば、そしてさらにカルヴァンは、他の宗教改革者たちと比較して、独立した教育書を著わさず、むしろその一般教育を教会の実践の中で貫徹しようとしているとするならば、それだけ一層、彼の教育思想を神学的構造の中に見い出す努力が求められている。このことに着目して、カルヴァンの教会教育論を展開した Reinhold Hedke の “Erziehung durch die kirche bei Calvin”, 副題は「教会の指導と教育及びその人間学的・神学的基礎」(1969) は注目に値する。以下、彼の論文に示唆を受けつつ、カルヴァンの教育思想の特色について論じたいと思う。

1. 神学的構造における教育思想

彼の主著『キリスト教綱要』のラテン語、*institutio*は「手引き」「教授」の意味をもつことは周知の通りである。『綱要』初版、(1536年)の翌年1537年に『信仰の手引き』が著わされたが、それは前者の要約であり、そしてさらにこの『信仰の手引き』が子供向きに書き直されたのが1542年の『ジュネーヴ教会信仰問答』であった。いずれの書もその内容の骨子は使徒信条、十戒、主の祈り、礼典の解説である。つまり、いずれも教えることを目的としたカテキズム的教育的文書という性格をもっている。カルヴァンは『綱要』の中で、その初版の序文に「教育書として与えるのみでなく……信仰表明として提示する」と述べ、またIV, iv, 1で「わたしはこの書を教育のための要約にしようとしてつとめているのに限りなく引き伸ばされてはならないのである」と述べて、後になって、信仰の弁明という要素がふくらんでいったとは言え、はじめから入門的教育書という性格をもっていたことがわかる。

さて、教育学を一般学の一つと考える時、カルヴァンの一般学への態度は、また彼の教育学への態度でもありうると推測される。ところで、カルヴァンは一般学をどのように見ていたのであろうか。彼は『綱要』2巻2章で、「一般恩恵」ということばを用いながら、次のように表現している。「主なる神が、我々に自然学や弁証法や数学やその他の学科を学ぶにあたって、信仰なき人々の業積や仕事によって助けられることを欲したもうならば、それを用いよう。それは、これらのことのうちに、神が自由に差し出したもうた贈りものを我々が無視すれば、当然我々の怠慢は罰せられるからである」と(II. 16)と。つまりあらゆる学問は、神の良い賜物であり、聖霊による賜物であって、これを積極的に使用すべきである、と述べていると考えられる。すべての学問はそれ自体善である。このような考え方に立ってカルヴァンは、人文主義的教育原理の方法を原則として、教会の教育的営みの中に吸収することをためらわなかった。しかしそこには次の制限が加えられる。いわく、「人に賢しさを得させる自由芸術、すべての学問も神の賜物である。しかしそれらの賢しさには限界がある。……それらが神の御言葉と聖霊に全く従うもの

とならないうちは、むなしいもの、無価値なものとみなされるべきだからである」(注解書、1コリント3:19, 20)。すなわち、それらの学問は、神の認識の土台から離れてはならず、あくまで神学のはしめにとどまるべきである。この限界を知っている一つの学問を、教会の奉仕において配置することは、徹底徹底許されていたといえよう。

この神学と教育学との関係についてのカルヴァンの理解は、あくまで教会という出来事の中でのみ実践されており、応用されている。すなわち教会における説教、礼典、訓練は神学的活動であると共に、副次的に教育学的活動をも含むという認識である。この教會的活動において、教育学は、単に許容されるべきものではなく、むしろ価値をもたらす有益な学科であることをカルヴァンは知っていた。この洞察に立ちつつ、カルヴァンは、教育学を教会に奉仕する一つの補助機能としてわくづけをしたと考えられる。

これらの認識は、神ご自身が神の聖なる救さい的出来事の中で、教育的方策を講じ、教育的に働かれるという、神の救さい史についての彼の解釈と呼応している。彼はそこで、「神による教育」*paedagogia Dei*を説いているわけであるが、この「神による教育」という彼の認識は、この「教会による教育」*educatio ecclesiae*の神学的認識の根拠でもある。またこのカルヴァンにおける神学と教育学の接点は、彼の一つの神学的聖書的な人間観にも基づくものである。

2. 教育主体としての神、キリスト、聖霊

カルヴァンの教育重視の思想は、彼の神学思想に深く食い込んでおり、神学に固有な神の救さい活動が、神の教育活動と見なされて論じられ、展開されている。神の救さい的取り扱いの中に神の教育的やり方が含まれていると解釈するカルヴァンにとって、神は一人の教育者*magister*、又教える人*doctor*である。またカルヴァンは、好んで「キリストの学校」*schola christi*、また「聖霊の学校」ということばを使い(Ⅲ. 9・5, I. 2・5)、神、キリスト、聖霊を真の教師、内なる教師とみなしている。これらの用例は数多くあ

る。たとえば、注解書エペソ 5・15は、「神のみ旨を我々に教える指導者また教師として神をもつ」といい、またエペソ 4・13は、「死に至るまで唯一の師であるイエスキリストの統御のもとで、その学校にあって成長し、我々を教える責任をキリストが負わされた教会の弟子であることを恥ずべきではない」と言っている。また彼は、ミカ 4・2において「神は最高のそして唯一の教師でなければ、神は神でなくまた教会のかしらでもない」と公式化している。イスラエルは、神の学校で教育された民であり、新約の教会も、神の学校で教育されている民である。神はすべて子供をも大人をも「神の学校」schola Deiに召集し、すべての人を彼の生徒、弟子にするのである。カルヴァンによれば、神は人の教師、あるいはdoctorとしてその生徒を、矯正し、castigo (Ⅱ. vii・14) 訓戒し、corrigo (Ⅲ. iv・31) 支配し、dominor (Ⅲ. viii・5) 刺激し、stimulo (Ⅲ. xix・2) 励まし、excito (Ⅲ. xxiii・12) そして教えるerudio (Ⅱ. vii・12) のである。カルヴァンにおいて、神は創造者、全能者、父として語られると同時に、教師、doctorとして、ひんぱんに語られている。

3. 神の適応としての神の教育

それでは、この神による教育は、具体的にどのような方法によって行なわれているのであろうか。神による教育の中心概念は、神による人間への適応 (accommodatio) にあるといえよう。この神の人間への適応は、神の神人同形同性による擬人的啓示方法や、儀式律法を含めた律法による方法、旧約時代のイスラエル民族への地上的形態を伴った象徴による方法、また新約時代の教会による聖礼典や諸制度全体を含んでいる。

カルヴァンによれば、旧約時代も新約時代も同一の神が同一の救いを首尾一貫して教えているのであり、その救いの本質は、世のはじめから、霊的、天上的、永遠的な祝福であり、仲保者キリストを信じる信仰において不変であった (Ⅱ. xi・10)。しかし、その救い方法においては、たとえば、パウロがガラテヤ書 4 章で、ユダヤ人を幼児にたとえ、キリスト者を若者にた

わちカルヴァンは、神の救さい的取り扱いの中に教育的方法が共に含まれていると考えたのである。

4. 教育制度としての教会

キリスト以後の神の救さい史の形態は、教会という制度を通してである。従って、カルヴァンにとって、教会は神の救さいの手段として、また神の教育の手段という意味をもつ。カルヴァンは『綱要』IV. i. 5において、エペソ4・11のみことばの釈義をしながら「教会の教育」(educatio ecclesiae)ということばを使用し、「神は、その民らを一瞬にして完成に至らしめる力を持っているにもかかわらず、ただ教会の教育のもとにおいて少しずつ彼らを育て上げ、成人の段階にまで達せしめること以外を欲してはおられないのである」といい、また「その方法は天上の教理dogmaを説教するつとめが牧師たちに課せられることによってである」と述べている。ここで「教会の教育」の方法として牧師による教理の説教をあげていることは注目してよい。カルヴァンの神学思想と教会の実践の中で教理は中心的位置を占めている。カルヴァンの教理の概念は複雑であるが、1) 啓示の出来事、2) 聖書とその内容全体、3) 教会の教義の三つを含むと考えてよいであろう。教会の使命は何よりもまさって教理(dogma)の説明(explicatio)解釈(intepretatio)適用(applicatio)にある。さてこの教理は大きく分けて三つの効用をもつ。それは1) 信仰としての認識、2) 正しい生活様式の教え、3) 訓戒と成長のための刺激という三つである。カルヴァンはロマ書4:23で、堅固な教理の実として、「一部分我々の信仰を強くするのに役立ち、一部分我々の生活を正しく規制するように教え、一部分我々を主に対する恐れへと励ます」と述べてこの三分類を意識している。さて、第一の教理の効用として、信仰という認識を生み出す働きをする。信仰は無知においてではなく認識において成立するとはカルヴァンの信仰観の骨頂をなすものである。正しい神認識は、人間の悟性の能力をはるかに超えたものであって、聖霊のひそやかな啓示なしにはだれもこの認識を得ることができない。従って神の子らは

みな主によって教えられるのでなければ信仰をもつことができないといわれるゆえんである。第二に、教理は生そのものの教えであり、魂のうちに座を占め、全人格をゆり動かすものである(Ⅲ. vi・4)。そして、「この生は、聖なる勧告と教育とによっていわば規制され、秩序づけられるのである」(ローマ12:1)。第三に、訓戒と成長という意味をもつ。「死に至るまで唯一の師であるイエスキリストの統御のもとで、その学校にあって成長しなければならない」(エペソ4:13)。このように神は、教会の教育の中で、主として教理の教えを通して、その民たちを信仰と啓蒙と成長へと向けて教育するのである。この教理の適用範囲については、全く無知の人々がキリスト教のごく初歩からいわば「いろは」からはじめるのに役立ち、次にいくらか始めていた人々がさらに進歩するのに役立つ(ヘブル8:11)、と述べているように、カルヴァンはこの教理による教会教育の対象を、カテキズム教育を中心とする青少年のクラスと、大人の成人教育の二つに大別して取り扱っていたと考えることができる。

青少年の教育については、「両親は神からゆだねられたものとして、子供たちを成長させ指導し教えるつとめを引き受けるべきである」(Ⅱ. viii・46)との立場から、また「クリスチャンの家族は小さな教会である」(コロサイ4:14) また「家の教会」(*familie ecclesiola*) (Ⅰコリント16:19)であるとの基本的認識に立って、教会教育と家庭教育は、同じ神の教育に服し、さらに学校教育、ジュネーヴ学院の予科(*schola privata*)における学びとの連携も考えられている。カテキズム、すなわち教理の要約を主なテキストとして、生徒たちは、教会と学校と家庭において主の教育に服するのである。

成人教育においては、牧師による説教による教育と聖礼典にかかわる訓練が主であるが、ここでは説教による教育を取り上げておくことにする。

彼はエペソ4:12の釈義において、「自分だけで聖書を読んでいればそれで十分なので教会の共同の奉仕など全く必要ないと思う人々はなんと傲慢であろう。パウロは我々にとって人間に治められ教えられるということが苦痛であっても、キリストの定めによれば、外的な説教によるほか正しく完成さ

れ一つにされる道はほかはないことをここで明らかにしている」と述べ、説教の効力について次のように述べている。

「説教は神の力の道具となるのである。実際人間の声はそれ自体の力によっては、魂のうちにまで透徹することはできない……しかしそれにもかかわらず神は人間の声がこのつとめにおいて、我々のうちに信仰を起こし創造するという効力をともなって働くのをさまたげたまわないのである」(ローマ 10: 17)。

「我々に信仰を吹き入れたもうのは、確かに神であるが、神はそれをご自身の福音の機関を通じてなしたもう。…それはちょうど救いをなす権能は神にあるが、しかもそれが福音の説教によって発現し、また表明されるのと同じである」(IV. i. 5)

このように、真の教育者は神、キリスト、聖霊であり、この内なる教師によってのみ、人は信仰的認識を与えられ、啓蒙と成長へと向かわしめられるのである。しかし同時に神は福音の機関を通して、人の口による外的説教を通して、この効力を発揮することをよしとされたのである。この神の適応の中に、人間が人間を教育するという教育学の領域が開かれているのである。そしてこの教師、牧師は同時に真の教師であられるキリストのしもべであり、キリストによって委託されてその職務に任命された奉仕者である。この職務を通して、牧師は、教育の主体は神であり、この神のみが真の教育をされることを常に期待しなければならない。ここに神学と教育学の接点があり、かつカルヴァンにおいては教育学は神学に仕える僕でなければならないのである。

5. 人間観 — 聖化の途上 —

カルヴァンは人間の虚弱さ、怠惰について深い洞察をもっていた。それ故に人は死ぬ時まで完成されることはあり得ないという基本的認識をもっている。人は信仰によって二重の恵みを受ける。義認と聖化である。義認において人は神と和解し、罪責から解放されて審判者の代わりにあわれみ深い父をもつ。第二の聖化において、人は古い人から新しい人へと再生をめざし、悔

改めの生活が始まる。「一言で悔改めを説明するならばこれは再生regeneratioである。この再生は、アダムの罪過によってみにくくされ、ほとんど抹殺されるに至った神の形を我々のうちに再形成することを目ざすものにほかならない」(Ⅲ. iii・9)と述べ、そして「この回復はただ一瞬、ないし一日ないし一年で完成するものではない。全生涯をあげて悔い改めを修練するようにしまたこの戦いは死によってのほか決して終結しない」(Ⅲ. iii・9)と述べて、悔い改め、すなわち再生の過程は一生涯続くと結論づけている。従ってこのカルヴァンの「再生」「悔い改め」についての理解は、当然、教会の教育における信仰者の教育を生涯教育とする。この点についてカルヴァンは教会は信者の母であると言い、次のように述べている。

「我々はこの母の胎内にみごもられ、この母から生みおとされこの母のふところで育てられ、ついにこの母の指導監督のもとに見守られて、最後に死すべき肉を脱ぎ捨てて、天使たちのようになるに至るの でなければ生命に入っている道はないからである。なぜなら我々の弱さは、我々が学校から退学することを許さず全生涯にわたって生徒であり続けるように要請するからである」(Ⅳ. i・4)。

また、人間における罪の残存、人間の肉の弱さの認識は、キリスト者に「自己否定」を命じ、主と共に「十字架を負う」ことの必要を促す。「キリストのまねび」(imitatio Christi)が要請される。信仰者は生涯、キリストと共に十字架を負って、忍耐と服従とを修練しなければならない。このimitatio christiは恐らくカルヴァンがパリのモンテーギュ学案に学んだ時に身につけた、独得の近代的啓蒙の尊厳気によるものであろう。彼はそこで修道土的秩序と修養を学んだと思われる。トマス・ア・ケンピスのimitatio christiに通ずるものが感じられるといっても恐らく間違いではないであろう。

6. その系譜—人文主義—

カルヴァンの教育思想の研究に従事すると一つの質問が頭をもたげてくる。すなわち、彼の教育思想は独創的なものかそれとも他の系譜に基づくのか、

という問題である。彼はどの伝統の流れからくみとっているのだろうか。

彼の教育思想の中には、人文主義と宗教改革の相互の影響と組み合わせに基づいた他の作者との意見の一致、類似性が見られる。がしかした、中世の伝統、近代の啓蒙、教父古代哲学、聖書の神、また口頭による教育学の知識など、まさしくたくさんの影響力がある。他の宗教改革者と同様に、これらの系譜の複雑な組み合わせの関係は、常に明日であるわけではないので、一人の人の教育思想家の影響、たとえば、ルター、ブツァー、ツウィングリ、メランヒトン、エラスムス、ビュデ、トマス・ア・ケンピス、イグナチウス、ロヨラ、アウグスチヌス、セネカ、アレキサンドリアのクレメンスらの影響力の一つだけを取り出して論じることが不可能に思われる。しかし、この系譜の解明の仕事は興味ある課題である。今回は、人文主義という一つの流れとの関わりを簡単にスケッチしたいと思う。

カルヴァンは、パリのコレージュ、ド・ラ・マルシュに在学中、近代教育学の創始者の一人といわれているマチューラン・コルディエに会い、人文主義の世界を吸収したと思われる。またパリの滞在の終り頃、カトリックの人文主義者ビュデ (Guillaume Bude) の強い影響を受けたことも知られている。カルヴァンはまた、回心前の1532年にセネカの *De Clementia* の注解書を書いていることも注目しなければならない。カルヴィニズムは別名「洗礼を受けたストア主義」とも言われるほどカルヴァンに与えたストア主義の影響は大きいと思われる。

その他、ストラスブール時代に、後のギムナジウム制度に深い影響を与えた、ヨハネス・シュトゥルム (Johannes Sturm) という著名な教育学者の影響も考えることができる。ジュネーヴのアカデミーの設立は、このストラスブール時代の所産であった。

さてHugoによれば、カルヴァンがセネカの哲学を評価した背景には、アレキサンドリア学派の流れとアウグスチヌス学派の二つの異なった流れの中で、どちらかというアレキサンドリア学派の影響によると述べている。アレキサンドリア学派、特にクレメンスの次のような考え方、すなわち、神の

導きによってギリシャ哲学の中にも多くの真理契機があるという見方に立って、セネカに近づいたとする見方は、同じアレキサンドリア学派の伝統に立つエラスムスによって、カルヴァンはかなり強い影響を受けたことを考えればうなずくことができる。しかし、アレキサンドリア学派がキリスト教と人文主義哲学との調和をはかる傾向にあり、アウグスチヌス学派がキリスト教による人文主義の批判、克服の傾向にあるとすると、やはり回心後のカルヴァンは、後者の立場にある。確かに、カルヴァンには人文主義からの切り株的伝統がたくさんあり、それらが合流して、彼の教育思想を形成したと考えられるが、しかし、アウグスチヌスの決定的影響力によって、人文主義的教育原理とは、たもとを分かっているのである。彼が受け入れた人文主義的要素は全く彼の神学に組み込まれており、ある部分は溶解さえしている。すべての人文主義的文化の要素は見事に彼の信仰の奉仕へと配置されたのである。ルターがエラスムスから分離したように、カルヴァンも同様にヒューマニストとしてではなく、宗教改革者として、神学者として生きたのである。神の子は神の子となるように教育されるのではなく、神の子に再生されるのである。意志の自由と人間の自律性は一方に属し、予定と神の独占活動は他方に属する。カルヴァンは、人間を世界の中心に置かず、人間の形成を最後の教理とはせず、むしろ教育と指導の領域においても、最終的目的を神に置いたのである。このことによって逆説的に人間は真の自由を受けとるのである。しかし、カルヴァンは、教理の知識によって教会建設を促進するのに役立つ補助手段として、人文主義的認識に感謝していることも見のがしてはならないのである。

註

- (1) Cf. REINHOLD HEDTKE, *Erziehung durch die kirche bei Calvin, Der Unterweisungs-und Erziehungsauftrag der kirche und seine anthropologischen und theologischen grundlagen*, QUELLE & MEYER, HEIDELBERG 1969.

渡辺信夫著『カルヴァンの教会観』改革社1976と、渡辺信夫；ジョン・ヘンセリック編『教会改革の伝統継承』1972、所収論文「カルヴァンにおける神学教育の理念」のそれぞれの註において、このヘトケの論文についての言及があるが、その内容についての本格的な言及はない。なお、この論文は PÄDAGOGISCHE FORSCHUNGEN, Veröffentlichungen des Comenius-Instituts, Munster による40数巻の研究叢書の中の一書である。このコメニウス・インスティテュートの研究叢書は山内一郎著『神学とキリスト教教育』日本基督教団出版局、1973. pp.22-23において紹介されている如く、神学と教育学との本格的な対話を試みているシリーズとして注目してよい。

(2) Cf. 石山脩平著『西洋近代教育史』pp.99-103

(3) Cf. Ford Lewis Battles and André Malan Hugo, Calvin's Commentary on Seneca's de Clementia; E.J. BRILL, LEIDEN, 1969. pp.46-62

<付記>

本稿は、日本基督教学会第34回学術大会（於、東京神学大学、1986年9月29日～30日）において「カルヴァンの教育思想とその系譜」と題して口頭発表を行ったものをまとめたものである。

THE CHARACTERISTICS OF J. CALVIN'S EDUCATIONAL THOUGHT

Yoshimasa Yoshioka

Calvin wrote no books about school and education compared with Lutter, Erasmus and Melanchthon. Therefore, there are few studies on Calvin's educational view. What does it mean? Is it no worth studying Calvin's educational thought?

No! Rather it means to be difficult to find it out because Calvin arranged pedagogy within a frame of theology completely.

Calvin was also an educational thinker who recognized the value of education with arranging pedagogy within a frame of theology. If the Reformation was generally also an educational reform and further Calvin wrote no educational books compared with other reformers and if he tried to accomplish liberal arts education within the practice of church, all the more the effort to find out his educational thought in the frame of theology should be needed. The main contents are as follows:

1. His educational thought within a theological structure
2. The God, The Christ, The Holy Spirit as an educational subject
3. The education of God as the accommodation of God
4. The church as an educational system
5. His view of man — on the way of sanctification —
6. His genealogy — humanism —

Calvin saw that the central concept of the education of God was the accommodation of God to men and the accommodation of God was essen-

tially the revelation method itself of the theological salvation history. So according to Calvin, God's educational treatment is not outside but inside of the God's revelation. Calvin expressed this element of God's salvation exactly using the concept and symbol of pedagogy. That is, he thought that God's treatment of salvation contained the God's educational method. Therefore, we should find his educational thought in the structure of his theology.